

## ある記憶

呉市 田中敏夫

齢をとると、寒さが身にこたえる。

寒さを感じる時、想い出さざるを得ないのが、あの極寒のシベリアの生活である。

色々の事件が山のようにあつて、全部書くことができたら、この原稿用紙一〇〇枚二〇〇枚では足りそうもないが、三十有余年前のことではあるし、加えて齢のせいもシベリアボケのせいも、想い出もなかなかはっきりしない。だが、はっきり覚えていて忘れられないことも数数ある。

新京集成第九作業大隊（大隊長安静大尉、大隊副官田中中尉）が旧建国大学で編成されて、近くの作業をするという名目で新京駅を出発したのは確か九月二十日のことだったと思う。

列車は作業するようすもなく北へ北へと北上し続ける。「これは黒龍江を渡つて一たんはソ連領に連れて行き、ウラジオ経由で日本へ帰すのだろう」との噂がひろがり、みんなを喜ばせたりした。

途中「孫呉」という駅で、プラットホームに日本人の老人がみじめな姿でしゃがんでいて、中国人数人が彼を取りまいて何やらがやがやとわけのわからんことをしゃべっていた。私はその老人に静かに尋ねてみた。娘がいて、駅附近の中国人の家に引きとられていると、それがわかったので、その娘を連れに行つて駅に戻り、その親子を列車に乗せて、一緒に内地に帰ろうと、保護を申し出た。親子もよろこんで、吾々と同行することを承諾した。

この娘の名は宇井トク子といつて旧大連高女出身者で父親の名はわからないが、国境近くの県の副県長で、ソ連軍が国境突破した時家族と一緒に日本軍と共に南下したが、その一団にとり残され、トク子さんが老父を思い二人だけになって北満をさまよい歩き、手や足の甲は松かさのように荒れもひどいものであった。そしてやっとたどりついたところが孫呉駅だったのであろう。

今にして想えば彼女等親子を列車にのせ日本につれかえつてやろうとしたことは、彼女等親子を不幸にしたか幸いにしたかわからない。父親は黒龍江を渡った地点で永眠した。吾が部隊での最初の犠牲者だった。

その後宇井トク子さんは男子ばかりの我が部隊と行動を共にしてブカチャーチャにたどりついた。そこにラーヤーという女軍医がいた。彼女は「目だま」の仇名で部隊ではなつかしい軍医さんだ。「目だま」さんについても

いろいろと思ひ出はあるが、紙面の都合上割愛する。

その目玉軍医さんの好意により彼女宇井トク子さんは看護婦さんのような仕事を与えられて病院にいたが、そのうち何処かへ連れ去られてしまった。今、どうしているかしら知るよしもないが気になる日本娘である。

今、中国から遺児達が帰国し肉親を求めている。宇井トク子さんがあのまま孫呉の方に行たら親（母）兄妹をたよって帰国して、再会のよろこびにふけているのはなかるうかと私のとった行動に今更ながら心を痛めるものがある。

幸あれ宇井トク子さんと大声をあげたい。

次は、入ソ第一の惨事。私達九大隊は、ブカチャーチャ到着後、山中にこもり坑木伐採作業のため、二棟の丸木小屋を建築した。日本側にはA少尉という一級建築士がいて、その建築作業にあたったが、丸木小屋には釘一本は勿論、カスガイ一本の使用も許されず、丸太とコケで小屋は建築された。小屋といっても三〇〇名から入る建物、ストーブのぬくもりで凍結している地盤はとけ、入居後間もなくその一棟が倒壊し、多数の死傷者を出した。十一月二十三日、むかしの新嘗祭当日はたまたま日曜日だったと思う。全く悲惨な大事件であわてふためいた。何名かの負傷者を引率して下山し、ブカチャーチャの収容所生活が始まるが、これが亦苦難、苦難の道であった。私はチルマに三回入れられた。チルマとは日本軍でいう営倉のことである。チルマに入れられた理由も亦面白い事柄もあるが、紙面の都合上、これ位にして……。中国人の腹の太い戦後処理に対し、ソ連人はずるく、小さい人間で私は大嫌いであるが、ソ連人にも、いい人、心やさしい人もいた。それは前出のラーヤー目玉と呼ばれる女軍医さん。それと収容所の副官（この人を想い出そうと努力するも、顔は出ても、どうしても名前が出てこない。）

こうして書きはじめてみると、ブカチャーチャにおける二年間の生活のいやな面が、次々と浮び出してくる。よく生きてきたもんだとつくづく思う。